船原古墳Ⅱ

― 1号土坑出土遺物概要報告編 ―

福岡県古賀市文化財調査報告書　第73集

２０１９

福岡県古賀市教育委員会

1. 忍冬唐草文心葉形鏡板付轡（鏡板表面写真）

2. 忍冬唐草文心葉形鏡板付轡（鏡板裏面写真）

4. 車輪文楕円形鏡板付轡

3. 忍冬唐草文心葉形鏡板付轡（文様拡大写真）

5. 車輪文楕円形鏡板付轡（鏡板裏面写真）

6. 環状鏡板付轡（2 点のうちの 1 点の写真）

カラー図版２

1. 鳳凰文心葉形杏葉（表面写真）

2. 鳳凰文心葉形杏葉（裏面写真）

3. 鳳凰文心葉形杏葉（文様板拡大写真）

4. 鳳凰文心葉形杏葉（表面写真）

5. 鳳凰文心葉形杏葉（裏面写真）

6. 鳳凰文心葉形杏葉（文様板拡大写真）

1. 二連三葉文心葉形杏葉（表面写真）

2. 二連三葉文心葉形杏葉（拡大写真）

3. 二連三葉文心葉形杏葉（拡大写真）

4. 棘葉形杏葉

カラー図版４

1. 金銅製歩揺付飾金具（雲珠）（復元 CG 画像）

4. ガラス装飾付辻金具

2. ガラス装飾付雲珠

5. ガラス装飾付辻金具

3. 鉢状雲珠Ｂ

6. ガラス装飾付辻金具

1. ガラス装飾付辻金具

4. 鉢状辻金具

2. ガラス装飾付辻金具

5. 鉢状辻金具

3. ガラス装飾付辻金具

6. 中心部別材辻金具

カラー図版６

1. 馬冑

2. 金銅板タイプ②（金銅板部分拡大写真）

3. 金銅板タイプ②（金銅板部分拡大写真）

4. 金銅板タイプ②（金銅板部分拡大写真）

5. 金銅板タイプ①（金銅板部分拡大写真）

6. 鉄鏃束

1. 弭

2. U字形刃先

3. 鉄斧

4. 鉄鏃

5. 鉄釘

カラー図版８

1. 小札甲
（出土時写真上層・北東上から）

2. 小札甲
（出土時写真下層・北東上から）

3. 小札甲
（出土時写真下層・南東から）

序

福岡県の西北部、玄界灘沿岸に位置する古賀市は、白砂青松の海岸を前にし、緑豊かな犬鳴山系を背にした、自然豊かな地域であります。このような地勢により古くから交通の要衝として栄え、地域の歴史を今に伝える貴重な遺跡も数多く残っております。

平成28年に国史跡となった船原古墳には、前方後円墳に伴う土坑に豪華な馬具をはじめ、武器武具などが大量に納められていました。

これらの遺物は、谷山北地区遺跡群文化財調査指導委員会の指導のもと九州歴史資料館とともに最新の調査手法を駆使して多大な成果を上げつつありますが、遺跡の総括を行う正報告までにはいましばらく時間がかかります。

本書は、平成29年度までの遺物調査についての成果をまとめた概要報告であり、学術研究の一助として、また文化財保護の高揚に寄与することがあれば幸いです。

最後になりましたが、調査に多大なご協力をいただいた関係各位には、厚くお礼申し上げるとともになお一層のご支援をお願い申し上げる次第です。

平成31年3月31日

古賀市教育委員会
教育長　長谷川　清孝

例　言

1．本書は古賀市教育委員会が、平成 26 年度から平成 30 年度に、国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、1 号土坑出土遺物の調査に関する現時点での記録である。

本書には下記の遺跡の調査記録を収録した。

遺跡名　船原古墳　ふなばるこふん

所在地　福岡県古賀市谷山 1166-1、1167、1168、1169、1170-3、小山田 506-4、507-2、508-2、528-2、529-2、530、531、532-2

2．本書に使用した方位は全て真北である。使用した座標系は世界測地系である。

3．本書に掲載した 1 号土坑遺物出土状況図は、株式会社とっぺんに作成を委託した遺構実測図を基に、岩橋由季が編集したものである。

また、平成 27 年度までの発掘調査に係る実測図は調査報告書より転載した。

4．本書に使用した遺物出土状況写真は古賀市教育委員会調査担当者が撮影した。遺物写真は九州歴史資料館が撮影した他、株式会社写測エンジニアリングに撮影を委託した。CT 画像は九州歴史資料館が撮影し、STL 画像の作成は株式会社とっぺんに委託した。

5．挿図及び写真のデジタルデータは古賀市立歴史資料館にて保管している。出土遺物は現在九州歴史資料館にて整理作業中である。

6．本書の執筆は岩橋由季、編集・校正は古賀市教育委員会担当者が行なった。なお、小札甲に関する報告は佐賀大学芸術地域デザイン学部重藤輝行教授にご指導いただいた。

7．なお、出土遺物は現在も整理作業中である。したがって、本書の報告内容は今後の調査を経て修正を余儀なくされることもあり得る。この点を注意して本書の利用を願うものである。

目　次

第 1 章　はじめに…… 1
　第 1 節　調査の経過…… 1
　第 2 節　調査組織…… 2
第 2 章　位置と環境…… 3
　第 1 節　地理的環境…… 3
　第 2 節　歴史的環境…… 3
第 3 章　調査の方法…… 5
　第 1 節　1 号土坑遺物出土状況の調査方法 …… 5
　第 2 節　遺物の調査方法…… 5
第 4 章　遺構の概要…… 6
第 5 章　1 号土坑出土遺物…… 11
　第 1 節　出土遺物の概要…… 11
　第 2 節　出土遺物について…… 11
第 6 章　まとめ…… 17

第１章　はじめに

第１節　調査の経過

平成 25 年３月、経営体育成基盤整備事業小野南部地区のほ場整備事業に伴って実施した発掘調査において、船原古墳の墳丘外とされる隣接地から遺物埋納坑（１号土坑）が発見された。これを受け古賀市教育委員会は平成 27 年度までの間に遺物埋納坑群及び船原古墳の再調査を行い、平成 27 年度に遺構の調査成果をまとめた報告書『船原古墳Ⅰ』を刊行した。

一方、出土遺物の整理、保存処理は平成 26 年度以降継続して行われており、報告書の刊行完了までには数年を要する。本書は、遺物調査の中間報告として、平成 29 年度までに明らかになった所見をまとめるものである。

平成 26 年度の調査

出土品整理を行うに先立ち、取り上げた遺物について、九州歴史資料館で撮影されたＣＴ画像の解析及び解析結果に基づく遺物の分類を行った。また、遺構埋土の一部について水洗選別を実施した。

平成 27 年度の調査

馬胄のクリーニング作業及び一部金属器の保存処理を行った。また、平成 25 年度に実施された１号土坑の三次元測量成果と遺物のＣＴ画像解析データを合成し、遺物出土状況図を作成した。２号土坑についても平成 26 年度実施の三次元測量データを基に遺物出土状況図を作成した。

平成 28 年度の調査

１号及び３号土坑の遺物を中心にクリーニング作業を行い、作業の完了した遺物について実測作業を実施した。１号土坑について、三次元測量データと遺物のＣＴ画像データとの合成データに基づく遺物出土状況検討用ソフトの作成に着手した。

また、出土須恵器の供給元について明らかにするため、九州大学に委託し胎土分析を行った。

平成 29 年度の調査

１号土坑の遺物を中心にクリーニング作業を行い、並行して遺物の実測作業を実施した。１号土坑の遺物出土状況検討用ソフトの作成も継続して行った。出土須恵器の胎土分析は、供給元の候補地と推定される周辺地域の窯跡出土品を対象に含め実施した。また、１号土坑埋土の一部について、水洗選別を行った。

第２節　調査組織

調査主体	古賀市教育委員会	
教育長	荒木　隆	（平成 26 年度）
	長谷川　清孝	（平成 27 年度～）
教育部長	吉村　博文	（平成 26 年度・平成 27 年度）
	清水　万里子	（平成 28 年度・平成 29 年度）
	青谷　昇	（平成 30 年度）
サンフレアこが館長	力丸　宏昭	（平成 26 年度・平成 27 年度）
文化課長	星野　美香	（平成 28 年度・平成 29 年度）
	力丸　宏昭	（平成 30 年度）
文化財係長	森下　靖士	（平成 26 年度～平成 29 年度）
	井　英明	（平成 30 年度）
文化財係　業務主査	甲斐　孝司	（平成 26 年度～）庶務・調査担当
嘱託	藤野　雅基	（平成 27 年度）調査担当
	立石　真二	（平成 27 年度～）庶務
主事	岩橋　由季	（平成 28 年度～）庶務・調査担当
	大江　道子	（平成 30 年度）庶務
調査協力　九州歴史資料館		
保存管理班長	加藤　和歳	（平成 26 年度～）
保存管理班	小林　啓	（平成 26 年度～）

平成 28 年度、古賀市の組織改編に伴い、所管課は「サンフレアこが」から「文化課」に変更している。

なお、平成 25 年８月に発足した谷山北地区遺跡群文化財調査指導委員会からは、その後毎年３回程度指導委員会を開催し、調査方針、方法等に関するご指導をいただいている。委員は下記のとおりである。

会長	田中良之	九州大学教授（平成 25 年８月～平成 27 年３月）
	今津節生	九州国立博物館博物館科学課長（現奈良大学教授）（平成 27 年７月～）
副会長	今津節生	九州国立博物館博物館科学課長（平成 25 年８月～平成 27 年６月）
	桃﨑祐輔	福岡大学教授（平成 27 年７月～）
委員	桃﨑祐輔	福岡大学教授（平成 25 年８月～平成 27 年６月）
委員	重藤輝行	佐賀大学教授（平成 25 年８月～）
委員	辻田淳一郎	九州大学准教授（平成 26 年７月～）

※田中良之氏が平成 27 年３月にご逝去されたことから、新たに辻田淳一郎氏に委員をお願いすることとなった。

第２章　位置と環境（Fig. １）

第１節　地理的環境

古賀市は福岡市の東北約 17㎞に位置し、南西で糟屋郡新宮町、南東で糟屋郡久山町、北で福津市、東で宮若市に隣接する。東西約 11.1㎞、南北約 7㎞、面積は約 43㎢である。

市の東部には犬鳴山地の山々がそびえ立ち、そこから派生する丘稜は福津市境（旧宗像郡境）、市中央部、新宮町境と大きく３か所で海岸側へと張り出している。主要河川は市中央部を西に流れる大根川、市南西部を北西に向かって流れる青柳川の両水系があり、海岸近くで合流し花鶴川となって玄界灘へ注ぐ。市域はこれらの河川によってほぼ３分される。大根川水系として、鹿野川、米多比川があり、青柳川には薬王寺川、谷山川、小山田川が合流する。

船原古墳は古賀市の中央寄りの内陸部に位置し、海岸からの直線距離は約 4.7㎞である。遺跡は谷山川の右岸に平行して伸びる丘陵の先端部に所在する。この丘陵の基盤は花崗岩である。

第２節　歴史的環境

船原古墳は６世紀末～７世紀初頭に造られたと考えられる。そこで船原古墳出現以前の古墳時代の市内の遺跡を概観したい。

市内で確認された古手の遺跡には、前期に遡る可能性がある薬王寺の深町古墳群がある。円墳の１号墳、方墳の２号墳と壺棺が１基あり、築造順は１号墳→２号墳→壺棺と報告されている（注１）。築造時期は４世紀代に遡ると考えられる。また、集落としては４世紀前半代の遺物が出土した新原の太田町遺跡がある。

５世紀代に入ると、市内で古墳の築造数が増加する。大根川の右岸には、径６～20m ほどの円墳群からなる千鳥古墳群、同じく円墳からなる花見古墳群がある。千鳥 21 号墳からは鉄刀・剣類や玉類、22 号墳からは鉄剣、鉄鏃、金銅製垂飾等の出土がみられる。また、花見１号墳では銅鈴、鈴、鉄刀・剣、鉄斧、鉄鎌、２号墳では玉類や琴柱形石製品、櫛、３号墳では鏡、玉類、鉄斧の副葬が確認されている。また、この地域の集落としては流遺跡がある。花鶴川左岸では永浦古墳群が造営される。永浦４号墳では、鉄刀・剣、鉄矛、鉄鏃、三角板鋲留短甲、横矧板鋲留眉庇付冑等大量の武器・武具が出土している。青柳川上流では、馬渡東ヶ浦遺跡Ｆ地区で古墳群が造営されている。副葬品は鉄剣、鉄鏃等の鉄製武器類を中心とする。青柳川右岸には川原庵山古墳群が位置し、最も多くの副葬品が出土した８号墳では、鉄斧、鉄製鍬先、鉄鉋、鉄矛等が出土している。

６世紀代には、大根川右岸で花見古墳が築造される。主体部からは、金銅製馬具類、銅椀、金銅装刀子等を含む豊富な副葬品が出土している。青柳川左岸では唐ヶ坪・浦口古墳群、楠浦・中里古墳群が造営される。楠浦・中里Ａ１号墳からは、頭椎大刀と推定される大刀が出土している。青柳川上流では瓜尾・梅ヶ内古墳群が形成され始める。径 10 数ｍの円墳からなる古墳群で、27 号墳からは金銅装の鏡板付轡等が出土している。

以上のように、５世紀以降市内各地で継続的に古墳が築造され、かつ各地域に突出した副葬品を有する古墳が存在したということが言える。ただし、船原古墳以外に市域では前方後円墳は発見されていない。また、船原古墳土坑出土品と市内の他の古墳の副葬品とを比較すると、船原古墳土坑出土品は質・量共に抜きん出たものであることは特筆されよう。

注１．石山勲編 1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＩ』福岡県教育委員会

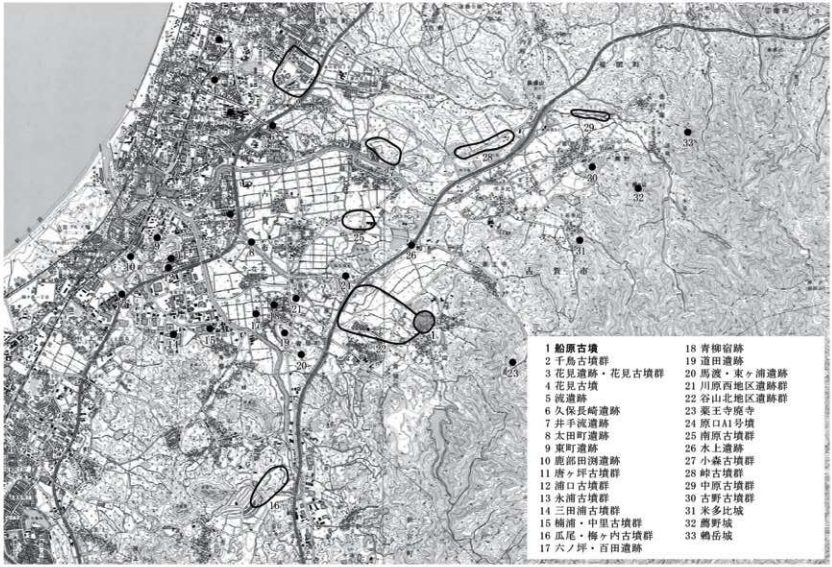


Fig.1　古賀市域 1/25,000 地図（遺跡分布図）

第３章　調査の方法

第１節　１号土坑遺物出土状況の調査方法

船原古墳が位置する丘陵の南西側にある調査区から船原古墳に伴う土坑が７基確認され、このうち１号土坑を含む５基を調査した。

１号土坑からは多量の金属器が折り重なって出土しており、かつ埋土内には木材や漆、繊維等の有機質が多量に遺存すると考えられた。そのため、通常の出土状況の記録に加えて、金属器とあわせて馬具、武器、武具等を構成していた金属以外の材質や、木材、繊維等の梱包材を使用した遺物埋納方法の復元を目指した記録と、そのための特殊な遺物の取り上げ方法が必要であった。この点に着目した九州国立博物館科学課長（現奈良大学教授）の今津節生氏にご助言いただき、手書きの実測図と写真撮影による記録に替えて三次元測量を導入した。

遺物出土状況の三次元測量は遺物の取り上げと平行して合計３回行った。これにより、重層化した遺物の出土状態を三次元的に記録することができた。

遺物の取り上げは、九州歴史資料館の加藤和歳氏、小林啓氏の多大な協力により可能となった。取り上げは重なり合う遺物を分離せずに付着したままとし、可能な限り遺物周囲の土壌ごとブロック単位で取り上げて番号を付した。

取り上げ後の遺物は、九州歴史資料館と共同でブロックごとにＸ線ＣＴスキャナ（以下ＣＴ）による撮影が行われた。これにより個々の遺物の断層像と三次元像が得られ、この画像を基に遺物の種類や数量等の調査を実施した。その結果抽出された各遺物の三次元像と現場で記録した遺物出土時の三次元測量データの合成データ並びにソフトを作成し、各遺物の出土状況の検討を行っている。

第２節　遺物の調査方法

取り上げたブロックごとにＣＴ撮影を行った後、その画像を基にして遺物の調査を実施した。これにより、土中にある遺物の種類や数量について明らかになった。その後、九州歴史資料館においてクリーニング作業を実施し、作業の完了した遺物から古賀市及び九州歴史資料館において実測を行った。また、必要に応じ、金属器同士あるいは金属器と有機質が銹着した状態での図化も行っている。

第４章　遺構の概要（Fig. ２～４）

１号土坑は船原古墳の後円部西側に位置する。主軸方位は船原古墳とほぼ同じで、N 37° Wである。平面形は逆Ｌ字形を呈し、長さ 5.3m、幅は 0.8m ～ 2.3m、深さ 0.8m 程である。土坑床面も含めて遺構内で切り合い関係はなく、遺物の出土状況に不自然な乱れも確認できなかったことから、１度の掘削によって形成された土坑に遺物を置いた後、埋め戻したものと考えられる。壁体はほぼ垂直に立ち上がる（注１）。

出土遺物は大半が床面に置かれたようにあり、物によっては積み上げられたようなものもある。平成 30 年度までに確認できた遺物は、馬具、武器、武具、農工具等が主で、その他種別不明のものや破片を含めると総計は 500 点を超える。

遺物の配置は、北、中央、南の３つに大きく分けられる。ただし、遺物の周辺から出土した有機質から、それぞれの中で各遺物がさらに小分けされていた可能性もある。以下、北から南に遺物出土状況を記載する。

土坑北側は床面に木製漆塗弓が束で置かれていた。中央に空間があり、東西の２つに分けられ、西側は両頭金具、弭が確認できるが、東側では確認できない。弭は北側端部から１点、南側端部から２点出土しており、出土状況からは弓に装着された状態であったと推定される。両頭金具は南端で出土した。木製漆塗弓の中央付近に鉄地金銅張の鞍が置かれていた。西側が前輪、東側が後輪で、東側に倒れたような状態で出土している。後輪側からは磯金具の縁と推定される破片と鞍金具１点が出土した。鞍の北側西壁寄りからは、床面から浮いた状況で一対の鉄製鐙が出土した。また、東壁寄りからは、鞍金具２点と鐙の吊金具２点、障泥の吊金具３点が出土している。鐙の吊金具は前述の鉄製鐙に伴うものではないため、木製鐙がもう一対あったと推定される。付近からはこの他にも鉸具が出土しているが、何に付属するかは不明である。後輪の南東脇には、壁に接して忍冬唐草文心葉形鏡板付轡１点とガラス装飾付辻金具６点、金銅製鉸具２点がまとまって出土しており、これらは面繋一式と思われる。この南東側から後述する馬胄までの間には、一部木製漆塗弓の上に重なって、鞍の二脚鈴状金具６点や鞍金具１点、鐙の吊金具２点が出土している。

中央部の北側からは、横倒しになった馬胄が鼻端を西に向けた状態で床面から浮いて出土している。馬胄の南側には鉄板や小札の束の痕跡と思われる漆膜が大量に折り重なっていたが、種別は不明である。その南からは小札甲１領とその付属具が出土している。これは斜めに倒れながら、上部が落ち込んだ状態となっているが、詳細は現在調査中である。小札甲の南からは、鐙の吊金具２点や鞍の鞍金具２点が出土した。

土坑の南側は西に張り出したような形をしている。ここでは主軸を東西に向けた長方形の範囲に遺物が密集し、この範囲の東西短辺から木質の付着した釘が出土している。観察結果等も踏まえ、ここから出土した遺物は木製組合式で釘固定の容器（以下、単に「箱」とする）に入れられていたと推定される。

箱内床面からは、大量の鉄鏃と矢柄等の漆膜が出土した。鉄鏃は束になっており、西側短辺と東側短辺、箱の中央付近にまとまって10数束が出土している。さらにこの上からは、馬具が折り重なって出土している。箱の北東隅付近では、鳳凰文心葉形杏葉３点、棘葉形杏葉５点、ガラス装飾付雲珠１点・同辻金具３点、鉢状雲珠１点・同辻金具３点、環状鏡板付轡１点、鈴数点等が出土した。また、これらの馬具と折り重なって円文を打ち出した薄い金銅板（以下、「タイプ①」とする）が出土しているが、断片化しており現在のところ種別は不明である。南東隅付近では、環状鏡板付轡

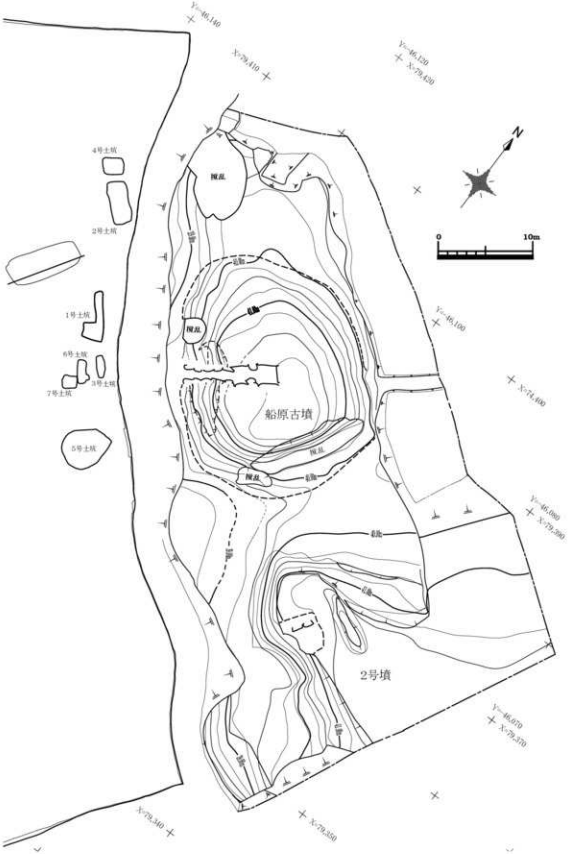


Fig.2　船原古墳現況地形計測図（S=1/400）

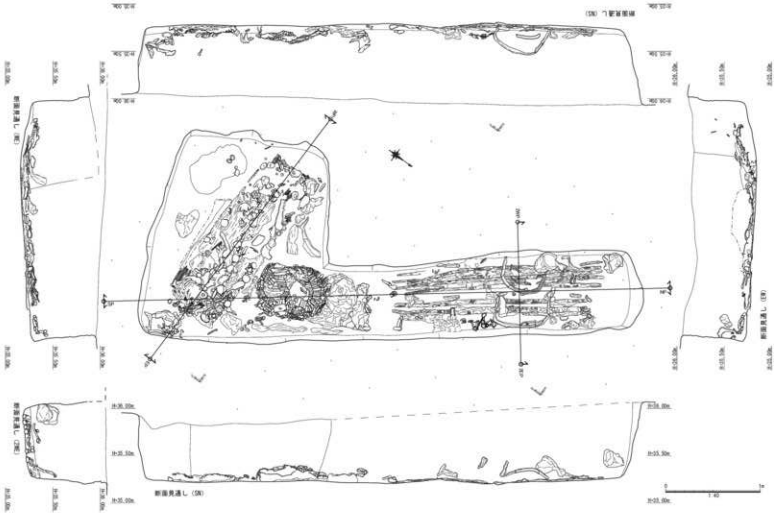


Fig.3　船原古墳１号土坑遺構図（S=1/40）

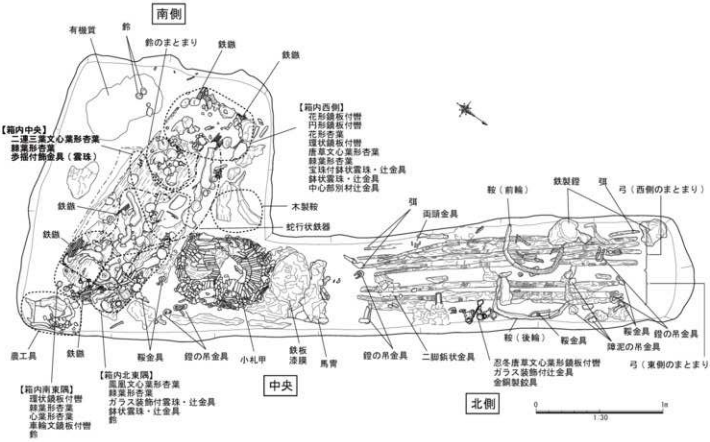


Fig.4　船原古墳１号土坑遺物出土状況（S=1/30）

１点、棘葉形杏葉１点、車輪文鏡板付轡１点、鈴数点等が出土している。また、タイプ①や透彫を施した金銅板（以下、「タイプ②」とする）も出土しているが、やはり断片化していて種別は分からない。この付近から箱内北西隅付近にかけて蛇行状鉄器３点が確認されている。箱の中央付近では、二連三葉文心葉形杏葉１点、棘葉形杏葉１点、歩揺付飾金具（雲珠）３点等が出土した。また、中央部南西寄りでは鈴数点がまとまって出土している。西側短辺付近からは、花形鏡板付轡１点、円形鏡板付轡１点、環状鏡板付轡１点、花形杏葉３点、唐草文心葉形杏葉１点、棘葉形杏葉２点、歩揺付飾金具（雲珠）１点、宝珠付鉢状雲珠１点・同辻金具５点、鉢状雲珠１点・同辻金具７点、中心部別材辻金具１点が出土した。さらに、西側短辺付近では、タイプ①・②が共に破片化した状態で出土している。なお、西側短辺の北隅に漆膜と鉄製板材からなる遺物が確認されており、種別は不明であるが、鞘の可能性もある。

箱の外でも遺物が確認されている。箱の東側短辺付近、土坑南東隅の壁際から鉄鎌やU字形刃先、鉄斧等の農工具がまとまって出土した。箱中央付近の南側からは、金の箔が有機質とともに出土した。このやや西寄りでは床から浮いた状況で有機質が検出され、その上で鈴２点が出土している。

注１．調査区の基本層位や土坑埋土の層序については『船原古墳Ⅰ』を参照されたい。

第５章　１号土坑出土遺物

第１節　出土遺物の概要

１号土坑からは破片も含めて 500 点以上の遺物が出土しており現在も整理作業を行っている。その中でこれまでに明らかになってきた遺物の種別とその数量について Tab.1 にまとめた。各遺物の詳細については次節で述べる。

第２節　出土遺物について

１．馬具

（1）轡

轡は全部で６点出土している。内訳は、忍冬唐草文心葉形鏡板付轡１点、花形鏡板付轡１点、車輪文楕円形鏡板付轡１点、円形鏡板付轡１点、環状鏡板付轡２点である。

忍冬唐草文心葉形鏡板付轡は、銜と左右の鏡板、引手が出土した。鏡板は、金銅張の地板鉄板に文様板と縁金を重ねて鋲で留めている。地板まで貫通している鋲は一部で他は飾鋲である。銜は鉄製で、引手端は鏡板裏面の銜留めで鏡板に連結されている。引手は金銅製の二条線引手で、これは鏡板の外側で銜に直接連結している。

花形鏡板付轡は、銜と左右の鏡板、引手が出土している。鏡板は立聞まで一体で作られており、地板鉄板に文様板と金銅板を重ね、周囲３か所と立聞２か所を鋲で留めている。文様板は立聞直下の三角文と６か所の円文を打ち抜いている。鏡板の裏面、地板鉄板には遊環が固定されている。銜と引手はいずれもこの遊環に連結している。引手は「く」の字引手である。

車輪文楕円形鏡板付轡は、銜と左右の鏡板、引手の一部が出土している。鏡板は立聞までを１枚の鉄板で作っており、これを切り抜いて車輪文を表現している。鉸具は立聞とは別作りで、中心に切れ込みを入れた立聞を刺金に通し折り込んで固定している。銜は、鏡板の裏側で左右に突起を作って動きを押さえる特殊な形態である。引手は鏡板の外側で銜に直接連結する一本引手である。

円形鏡板付轡は、銜と左右の鏡板、引手が出土した。鏡板は地板鉄板に金銅板を被せて鋲で留めたものである。地板は立聞までを一体に作っており、中央は遊環を入れるために長方形の孔を２つ開けている。金銅板は四方４か所を表側にドーム状に打ち出して円文を作り、円文の縁には小さな点描が一周巡る。また、中央の縦長長方形の部分も表側に打ち出している。このような文様配置および構造の鏡板は他に例がない。鏡板の裏面には遊環が固定されており、銜はこの遊環に連結している。引手は遊環に連結した銜の引手側の環に連結する一本引手である。

２点ある環状鏡板付轡はいずれも造付立聞である。うち１つは片側の鏡板と引手、銜の一部が出土している。鏡板は、環状で銜先が連結する。引手はこの銜に連結する「く」の字引手である。もう一方は左右の鏡板と引手もしくは銜の一部が出土したが、現状では詳しい構造等は不明である。

（2）鞍

鞍は全部で５点分が出土している。うち１点は金銅装鞍であり、３点は鉄製鞍金具や二脚鋲状金具が伴う木製鞍、もう１点は木質から鞍と推定されるものである。

金銅装鞍の前輪と後輪は縁金が出土した。また、磯金具の縁金と考えられる破片と鞍金具１点が出土している。鞍金具は座金と鉸具、脚からなる。座金は円形で、鉸具は輪金のみで刺金はない。脚は鉸具の基部の横棒に巻き付けている。

鉄製の鞍金具は、２点１対のセットが２対、それとは別に２点が出土している。いずれも座金と

Tab.1　船原古墳１号土坑出土遺物一覧

大別	器種　分類		点数	出土位置	図版番号	
					CT	写真
馬具	轡		6			
		忍冬唐草文心葉形鏡板付轡	1	北側	図版1-1～1-3	カラー図版1-1～1-3
		花形鏡板付轡	1	南側箱内西側	図版1-4～1-6	－
		車輪文楕円形鏡板付轡	1	南側箱内南東隅	図版2-1～2-2	カラー図版1-4～1-5
		円形鏡板付轡	1	南側箱内南東隅	図版2-3～2-5	－
		環状鏡板付轡	1	南側箱内西側	図版3-1	－
		環状鏡板付轡	1	南側箱内南東隅・西側	図版3-2	カラー図版1-6
	鞍		5			
		金銅装鞍	1	北側	図版3-3	－
		木製鞍	4	北側	図版3-4	－
				中央	図版3-5	－
				北側	図版3-6～4-6	－
				南側箱外	－	－
	鐙		7			
		鉄製壺鐙	1		図版5-1	－
		木製鐙	6	北側	図版5-2～5-3	－
				中央	図版5-4～5-5	－
				北側	図版6-1～6-2	－
				北側	図版6-3～6-4	－
				南側箱内北東隅	図版6-5～6-6	－
				北側	図版6-7～6-8	－
	杏葉		19			
		鳳凰文心葉形杏葉	3	南側箱内北東隅	図版7-1～7-4	カラー図版2-1～2-6
		花形杏葉	3	南側箱内西側	図版7-5～8-3	－
		二連三葉文心葉形杏葉	1	箱内中央	図版8-4	カラー図版3-1～3-3
		唐草文心葉形杏葉	1	箱内西側	図版8-5	－
		心葉形杏葉	1	南側箱内南東隅	図版8-6	－
		棘葉形杏葉	10	南側箱内各所	図版9-1～9-10	カラー図版3-4
	雲珠		8			
		金銅製歩揺付飾金具(雲珠)	4	南側箱内中央	図版10-1～10-4	カラー図版4-1
		ガラス装飾付雲珠	1	南側箱内北東隅	図版10-5	カラー図版4-2
		宝珠付鉢状雲珠	1	南側箱内西側	図版10-6	
		鉢状雲珠	2	南側箱内北東隅・西側	図版11-1～11-2	カラー図版4-3
	辻金具		25			
		ガラス装飾付辻金具	9	北側・南側箱内北東隅	図版11-3～12-6	カラー図版4-4～5-3
		宝珠付鉢状辻金具	5	南側箱内西側	図版13-1～13-5	－
		鉢状辻金具	10	南側箱内北東隅・西側	図版14-1～15-3	カラー図版5-4～5-5
		中心部別材辻金具	1	南側箱内西側	図版15-4	カラー図版5-6
	障泥		1			
		障泥	1	北側	図版15-5～15-7	－
	鈴		30			
		大	6	南側箱内各所	図版16-1～16-6	－
		中	8	南側箱内各所・南側箱外	図版17-1～17-5	－
		小	16	南側箱内各所	図版18-1～19-6	－
	馬冑		1	中央	－	カラー図版6-1
	蛇行状鉄器		3	南側箱内各所	図版20-1～20-6	－
武器	鉄鏃		不明	南側箱内各所	図版21-1～21-8	カラー図版6-6
	弓					
		弭	3	北側	図版22-1～22-3	カラー図版7-1
		両頭金具	不明	北側	－	－
武具	小札甲		1	中央	図版27-1～28-7	カラー図版8-1～8-3
農工具			4			
		U字形刃先	1	南側箱外	図版22-4	カラー図版7-2
		鉄斧	2	南側箱外	図版22-5～22-6	カラー図版7-3
		鉄鎌	1	南側箱外	図版22-7	カラー図版7-4
その他	釘		34	南側箱内各所・箱外	図版23-1～26-3	カラー図版7-5
合計			144			

鉸具、脚からなる。座金は円形で鉸具は輪金のみ、脚は鉸具の基部の横棒に巻き付けるものである。

（3）鐙

鐙は７対出土している。うち１対は鉄製鐙であり、これ以外は鉄製の吊金具が付く木製鐙と推定される。

鉄製鐙は、大型の杓子形壺鐙である。壺部に長方形の柄が付く。吊金具や兵庫鎖等の構造は現在のところ不明である。

鉄製の吊金具は、鉸具、兵庫鎖、吊金具が一連となったもの２点２対と、吊金具２対、そして２対分と考えられる吊金具の破片が出土している。鉸具、兵庫鎖、吊金具が一連になったものは、輪金に刺金が付く鉸具、兵庫鎖３点、上部がU字形で３か所鋲打ちの吊金具からなる。吊金具のみのものも上部がU字形もしくはコ字形で２か所ないし３か所の鋲打ちと考えられる。

（4）杏葉

杏葉は、６種類 19 点が出土している。種類別の内訳は、鳳凰文心葉形杏葉３点、花形杏葉３点、二連三葉文心葉形杏葉１点、棘葉形杏葉 10 点、唐草文心葉形杏葉１点、心葉形杏葉１点である。

鳳凰文心葉形杏葉は、地板鉄板に金銅板を被せ、その上に文様板と縁金を重ねて鋲で留めている。地板まで貫通している鋲は一部で他は飾鋲である。文様は左右対称の鳳凰文である。立聞は吊鈎金具で３鋲打ちである。

花形杏葉は、地板鉄板に文様板を重ねて周囲３か所と立聞２か所を鋲で留めている。文様板は６か所の円文と立聞直下１か所の三角文を打ち抜いている。

二連三葉文心葉形杏葉は、地板鉄板の上に文様板、その上に縁金を重ねて周囲６か所を鋲で留めている。文様板には三葉文を左右対称に配置している。立聞は吊鈎金具で３鋲打ちである。

唐草文心葉形杏葉は、地板鉄板に文様板を重ねて周囲６か所を鋲で留めている。文様は左右対称の唐草文である。立聞には横広の立聞孔が開けられている。

心葉形杏葉は地板鉄板の上に文様板を重ねて鋲で留めている。最大幅は６cmほどと推定され、他の心葉形杏葉よりも一回り小さく、別の種類であると考えられる。文様は唐草文のようであるがはっきりしない。

棘葉形杏葉は鉄板１枚作りで、他に文様板等の痕跡は認められない。立聞まで一体で作る。肩部の両端には小さな段、裾部の両端にも小さな突起が付いている。立聞には吊金具を取り付けるための横広の孔が開けられている。

（5）雲珠

雲珠は５種類 13 点が出土している。種類別の内訳は、金銅製歩揺付飾金具（雲珠）４点、ガラス装飾付雲珠１点、宝珠付鉢状雲珠１点、鉢状雲珠２点である。鉢状雲珠２点は、サイズが異なるため別の種類と推定される。

金銅製歩揺付飾金具（雲珠）は、唐草文を透彫した六角形の台座を伴うもの４点と、現状で台座が確認できず上部の飾りのみのものとがある。雲珠は台座の中心と角に支柱を立てる。中心の支柱は他より大きく、傘状に広がる８本の吊手の先にそれぞれ飾りを垂下する。台座は上から見ると花弁形になっている。支柱先端は六角形の側面に溝が彫られていて上から見るとこちらも花形を呈する。垂飾は紡錘形で滑らかな曲面をなす。上部には孔が開けられ、吊手に通している。６か所の支柱は小型で、中心の支柱と同じく傘状に広がる４本の吊手に飾りを垂下している。支柱の台座はややドーム状となり、支柱先端は六角形になるように面取りしている。垂飾は中心の支柱のものと異なり全体に扁平で縁が盛り上がる形状をしている。台座の各辺の中央には２個１対の小さな孔が開

けられている。

ガラス装飾付雲珠は、中心部にガラスの飾りを取り付けたものである。ガラスの飾りは、縁を丸く折り上げたドーム状の銅板の上に重ねられ、輪金の裏側からはめ込まれている。輪金と脚は一体作りで、脚の間隔は不均等な６脚である。脚はいずれも３鋲打ちである。輪金の腹部は３段の階段状になっている。

宝珠付鉢状雲珠は、中心のドーム部から脚までを一体で作っている。ドーム部の頂点には宝珠形の飾りが付く。脚はいずれも１鋲打ちである。

鉢状雲珠としたものは宝珠飾りが付かないタイプで、いずれもドーム部から脚までを一体で作る。大きいものをＡ、小さいものをＢとする。Ａは６脚残るが、脚を均等に配すると８脚に復元できる。残存している脚はいずれも１鋲打ちである。Ｂは薄手の金銅製で４脚残り、いずれも１鋲打ちである。

（６）辻金具

辻金具は全部で５種類 25 点が出土している。種類別の内訳は、ガラス装飾付辻金具９点、宝珠付鉢状辻金具５点、鉢状辻金具 10 点、中心部別材辻金具１点である。

ガラス装飾付辻金具は、ガラス装飾付雲珠と同様の技法で中心部にガラスの飾りを取り付けている。輪金と脚は一体作りで、３鋲打ちの脚が４脚付いている。輪金の腹部は３段の階段状である。

宝珠付鉢状辻金具は、中心のドーム部から脚までを一体で作る。ドーム部の頂点には半球状の飾りが付く。脚は４脚でいずれも１鋲打ちである。

鉢状辻金具としたものは宝珠飾りが付かないタイプで、いずれもドーム部から脚までを一体で作る。脚は４脚と推定されすべて１鋲打ちである。ドーム部に稜が立つもの７点と稜が立たないもの３点があり、後者は金銅製で前者より薄手である。

中心部別材辻金具は、輪金と脚を一体で作った金銅製の部分のみが残っており、中心部には別の飾りが取り付けられていたと推定される。脚は４脚あり根元に２鋲を打つ。

（７）障泥

障泥の吊金具が３点出土している。吊金具は心葉形の座金具とその上縁部の立聞状の部分に取り付けた鉸具からなる。座金具は四方に２個１対の小孔が開けられており、一部に鋲の痕跡が残る。鉸具は縁金に刺金が付く。

（８）鈴

鈴は全部で 30 点出土している。大きさから３種類に分けられ、内訳は大型が６点、中型が８点、小型が 16 点である。

直径７㎝以上のものを大型とした。最大のものは直径約 12㎝である。青銅製で上から見ると八角形を呈する。鈕は丸く、鈕孔も円形である。鈴の上半部には小孔が１か所開けられている。鈴の中心付近は突帯を３本巡らせている。鈴口の周りには帯状の縁が付く。鈴口と鈕口の向きは互い違いとなる。

直径４～５㎝ほどの大きさのものを中型とした。青銅製で２種類がある。一方は、基本的な形態が大型と類似し、上から見たときに八角形を呈する。鈕と鈕孔は丸い。上半部には大型品と同様、小孔が１か所開けられている。突帯が２本巡り、鈴口の周りには、帯状の縁が付く。鈕孔と鈴口は平行となる。中に入れられた丸が確認できる事例もある。もう一方は、上半部と下半部を別に作って合わせている。合わせ目には鍔が付き、上半部の頂点には別作りの鈕が付く。

小型の鈴は直径２～３㎝ほどの金銅製である。上半部と下半部は別作りで、合わせ目には鍔が付

く。鈴口の両端は円形になっている。鈴を垂下するため、頂点の金具は割りピン状としている。

（9）馬冑

馬冑は1点出土した。鉄製で、馬に被せた半筒形の面覆部、その後端に垂直に立てられた庇部、面覆部の両側に垂下した頬当部から構成される。面覆部は、上板1枚、側板2枚の合計3枚の鉄板からなる。上板を分割しないタイプのもので、馬の額から鼻先までを1枚の上板が覆い、その側辺に側板を下重ねして鋲で留めている。庇部は半円形の1枚の鉄板で作られており、面覆部の上端を折り上げて、そこに庇部を上重ねして鋲で留めている。頬当部は半円形の1枚の鉄板を左右側板の下にそれぞれ蝶番を用いて垂下している。蝶番は金具2点からなり、左右各2組、計4組を使い、面覆部の側板と頬当部にそれぞれ3鋲打ちで留めている。馬冑を頭部に固定するための革帯等を取り付ける鉸具は全部で6か所作る。鉸具の取り付けは、面覆部の側板下部中心よりやや前方、同じく面覆部の側板後方下端、頬当部の下端やや前方の3か所で左右対称である。眼孔は面覆部の上板と側板にまたがって楕円形に開けられている。眼孔部の上後方と面覆部の鼻先は曲面的に打ち出され、立体的に仕上げられている。

（10）蛇行状鉄器

3点出土している。詳細な形態が確認できたものは、湾曲部と蛇行部、袋部が別に作られている。湾曲部はU字形で、端部を外側に曲げて輪を作る。蛇行部は6か所屈曲しており、湾曲部側から2回の蛇行は180°近く、その後は90°前後の角度で蛇行する。

（11）その他

土坑南側箱内の東西小口付近で確認された金銅板は2種類が確認されている。直径1cmほどの円文を列状に打ち出し、その周囲に小さな点描を不規則に配置したタイプ①。透彫と毛彫・点描を施したタイプ②とがある。タイプ①は直径0.5cmほどの鋲を2cmほどの間隔で打っている。タイプ②は、小型の鈴本体と上部の割りピン状金具との間に位置するものが複数確認できることから、ここに取り付けられていたと考えられる。いずれも現在のところ種別は不明である。

2．武器

（1）鉄鏃

鉄鏃束の主体となっているのは両刃の長頸鏃で、矢柄に装着された状態である。束の単位は不明であるが、一部の束の表面に胡籙金具や胡籙に由来すると考えられる木質や繊維が銹着していることから、十数本から数十本の単位で盛矢具に入れられていたと推定される。

（2）弓

弓は木製漆塗りである。遺存している漆膜から、10～12張あったと考えられる。弓の端部からは銀製の弭が3点出土している。出土状況から弓に装着された状態と推察される。

3．武具

（1）小札甲

現地では部位、全体構造の把握が難しかったため、上面に位置するものから、まとまり、水平方向の小札のつながりを捉えながら取り上げを行った。現在は、まとまりごとに取り上げた小札のクリーニングを進めている段階にある。そのため、枚数、構成は確定していない。全体的には幅2.2cm前後で、縅孔1列のものが主体である。平札は長さ9cm、8.5cm、8cmが主体となる。腰札はゆるやかに屈曲したもので、上下部の折り曲げは不明瞭である。長さは13～14cmほどである。また、

上部を表に折り曲げた個体があり、腋の部分で、肩甲につなげる部分と考えられる。

土壌に接していた小札が多く、全体的に有機物の遺存状況は良くない。ただ、土に接していない小札と小札の間には絨や綴の革紐が確認できるものもある。小札の下端は覆輪状に革をあてるものもあるようである。

また、黒漆膜が小札間に挟まっているものも見られる。漆膜は断片的であるが、孔が確認できること、出土時には方形を呈する場合もあったことから、馬甲等の漆塗り革製品を組み合わせたものではないかと考えられる。

4．農工具

（1）U字形刃先

U字形刃先は1点出土している。残存長 17.1cm、最大幅 17.9cm。復元刃部幅は 4 cm 程度と短く使用によって摩耗しているものと推測される。耳端部付近では刃を形成せず断面の先端は面をなしている。内側の溝は耳端部まで形成されているが、柄の痕跡は確認できない。

（2）鉄斧

袋状鉄斧が2点出土した。

一つは全長 13.5㎝、最大幅 8.0cm でほぼ完形である。袋部は幅 4.6cm、厚さ 3.6cm と横断面が横長の楕円形を呈する。閉じ合わせは密着している。袋部の底は水平ではなく斜めになっている。袋部内に柄の痕跡は残っていない。刃部はやや肩が張る有肩式で、先端に向けてなだらかに広がる。

もう一方は全長約 8.8㎝、最大幅約 4 cm でほぼ完形、袋部横断面は横長の楕円形で、閉じ合わせは密着している。刃部はやや肩が張る有肩式であり、肩部から刃部先端にかけてはあまり広がらない形状である。

（3）鉄鎌

鉄鎌は1点出土している。全長 16.2cm、基部幅 2.5cm で、全体に薄手である。基部全体を折り返して着装部を形成している。折り返しは身部に対してほぼ直角である。基部の折り返しを表に向けたときに峰が右を向く、いわゆる「折り返し乙技法」（注1）で製作されている。この技法を用いた鉄鎌は日本列島では少数派である一方、朝鮮半島では主流を占める。

5．釘

釘は 30 本以上出土している。いずれも体部横断面が方形をなす角釘であり、法量から大きく二つに分類できる。一つは体部一辺が 0.5㎝程度、全長は完形のもので 7.4㎝の大型品である。頭部は体部よりやや張り出す笠形を呈する。もう一つは体部一辺が 0.2 ～ 0.3㎝程度、全長は完形のもので 3 ㎝前後の小型品である。頭部は体部から張り出す扁平な笠形を呈する。釘の大部分には木質が付着しており、木目の方向が異なる二種類の木質が確認できるものが多い。出土状況もふまえると土坑内にあったと考えられる箱を組み立てるために用いられていたと推定される。

注1．都出比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」

第6章　まとめ

これまでの調査によって、主要な遺物の種別と点数が明らかになってきた。馬具は轡6点、鞍5点、鐙7対、杏葉6種類19点、雲珠5種類13点、辻金具5種類25点、障泥1点、鈴30点、馬冑1点、蛇行状鉄器3点、武器は鉄鏃多数、弓10～12張、武具は小札甲1領、農工具はU字形刃先1点、鉄斧2点、鉄鎌1点が確認されている。馬具に注目すると、鐙が7対で最も多いが、うち2対は破片で実数を確定するに至らない。したがって、現状では轡の6点が確実な最大数となり、1号土坑には最多で6セット分の馬具が入れられていたと考えられる。一方で、鞍や雲珠、辻金具、障泥など数量が足りないものもあり、馬具のセット関係についてはさらに検討する必要がある。

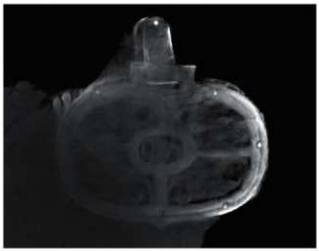
また、クリーニングやＣＴ画像の解析、材質分析等の進展に伴い、一部の遺物について形態や構造が明らかになってきた。その結果、ガラス装飾の雲珠・辻金具のように国内では確認されておらず、朝鮮半島に求められる遺物があることが明らかになった。このようなものには、他に馬冑、蛇行状鉄器等がある。一方で、忍冬唐草文心葉形鏡板付轡や鳳凰文心葉形杏葉のように、国内に類例はあるが特に優れた技法で作られた遺物があることも明らかになった。ただし、学術的な位置付けは今後さらに検討する必要がある。加えて一部の遺物の製作時期が土坑の時期よりも遡ることについては、製作から埋納までの時間差があることをふまえ説明する必要がある。

遺物出土状況は、主要な遺物の出土位置や大まかな上下関係、木製の箱の存在等が把握でき、土坑内における遺物の配置状況について少しずつ明らかになってきた。しかし、馬具が革帯でつながった状態で入れられていたのか、個々の遺物が何らかの容器に入れられていたのかなどについては未解明で、各遺物や周辺から検出された有機質等を多角的に対比・検討することで明らかにしていかなければならない。また、各遺物が土坑に入れられた時の向きや重なりなどについても、その後有機質が腐食し土圧等の自然営為によって遺物が原位置から動かされた過程を検討・解明する必要がある。このことが墳丘外の埋納行為の意義の解明につながると考えている。

船原古墳の正式な報告書は2020年度～2022年度の3か年にわたり刊行する予定である。上記以外にも解明すべき点は多くあり、本概要報告書を経て今後さらに調査研究を進めていきたい。

図　　版

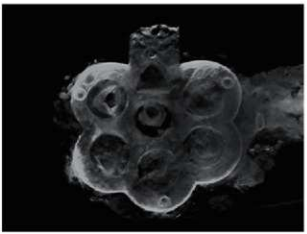
1. 忍冬唐草文心葉形鏡板付轡（鏡板 CT 画像）



2. 忍冬唐草文心葉形鏡板付轡（貫通鋲 CT 画像）

3. 忍冬唐草文心葉形鏡板付轡（銜と引手 CT 画像）

※鏡板の横断面．上が表面で下が裏面．鏡板裏から表に端部が出ているのが銜で、鏡板表に引手が連結している．



4. 花形鏡板付轡（鏡板 CT 画像）

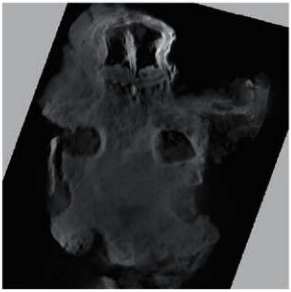
5. 花形鏡板付轡（鏡板断面 CT 画像）

※鏡板の横断面．上が表面で下が裏面．真ん中の上に膨らんだ部分が中央の円文で、両脇のへこんだ部分が周囲に配された円文．

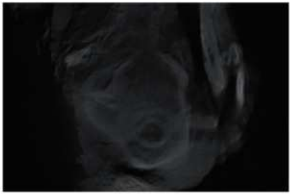
6. 花形鏡板付轡（銜と引手 CT 画像）

※鏡板の横断面．上が表面で下が裏面．鏡板裏の輪が遊環で、そこに銜と引手が連結している．

図版２



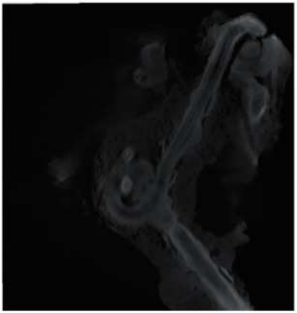
1. 車輪文楕円形鏡板付轡（鏡板 CT 画像）



2. 車輪文楕円形鏡板付轡（銜と引手 CT 画像）

※鏡板の横断面．下が表面で上が裏面．鏡板裏から表に銜の端が出ている．

3. 円形鏡板付轡（鏡板 CT 画像）

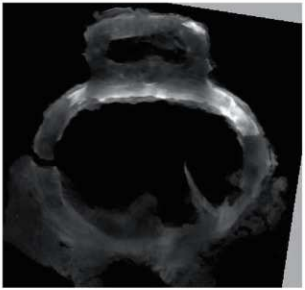


4. 円形鏡板付轡（銜と引手 CT 画像）

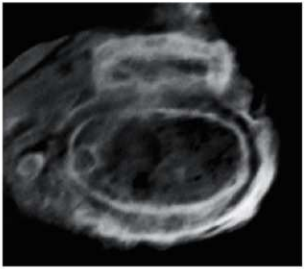
※鏡板の裏の縦断面．画面中央の遊環の断面に銜(画面右上に伸びているもの)が連結し、この銜に引手(画面右下に伸びているもの)が連結する．

5. 円形鏡板付轡（円文部点描 CT 画像）

※鏡板表面の円文部分の拡大画像．円文の周囲に小さな点描が一周巡る．

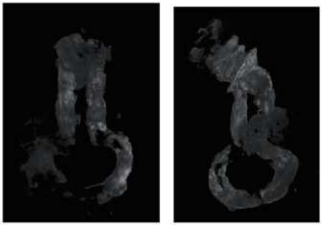


1. 環状鏡板付轡（2 点のうちの 1 点の鏡板 CT 画像）

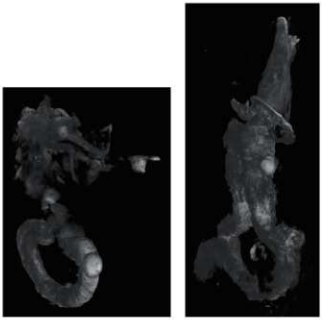


2. 環状鏡板付轡（2 点のうちもう1点の鏡板CT画像）

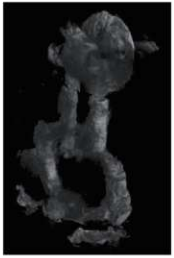
3. 金銅装鞍（鞍金具 CT 画像）



4. 鉄製鞍金具（CT 画像）



5. 鉄製鞍金具（CT 画像）



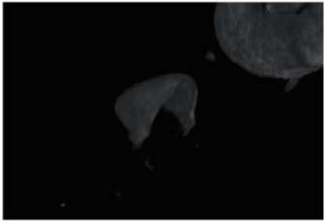
6. 鉄製鞍金具（CT 画像）

図版４

1. 二脚鋲状金具（CT 画像）

4. 二脚鋲状金具（CT 画像）

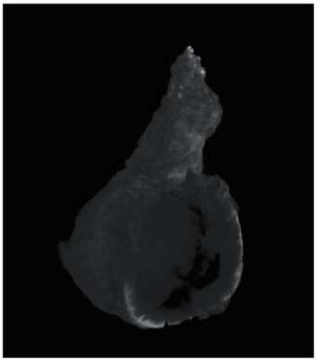
2. 二脚鋲状金具（CT 画像）



5. 二脚鋲状金具（CT 画像）

3. 二脚鋲状金具（CT 画像）

6. 二脚鋲状金具（CT 画像）



1.鉄製壺鐙（CT 画像）

2.鐙の吊金具・兵庫鎖（CT 画像）

3.鐙の吊金具・兵庫鎖・鉸具（CT 画像）

4.鐙の鉸具（CT 画像）

5.鐙の吊金具・兵庫鎖・鉸具（CT 画像）

図版６

1. 鐙の吊金具（CT 画像）

5. 鐙の吊金具（CT 画像）

2. 鐙の吊金具（CT 画像）

6. 鐙の吊金具（CT 画像）

3. 鐙の吊金具（CT 画像）

7. 鐙の吊金具（CT 画像）

4. 鐙の吊金具（CT 画像）

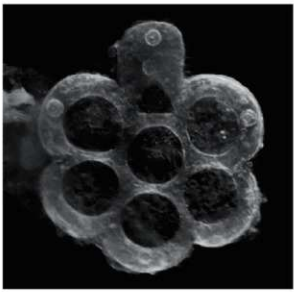
8. 鐙の吊金具（CT 画像）

1. 鳳凰文心葉形杏葉（CT 画像）

2. 鳳凰文心葉形杏葉（貫通鋲 CT 画像）

3. 鳳凰文心葉形杏葉（CT 画像）

4. 鳳凰文心葉形杏葉（CT 画像）



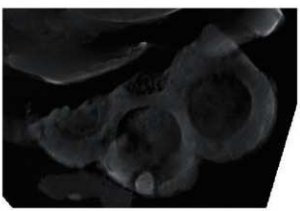
5. 花形杏葉（CT 画像）

6. 花形杏葉（文様板断面 CT 画像）

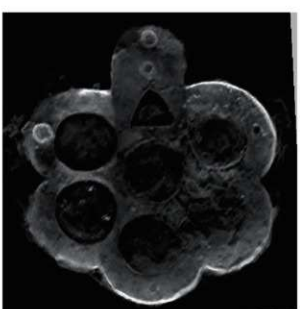
※鐙板の横断面．下が表面で上が裏面．一段へこんでいる（上に窪んでいる部分）部分が円文の部分．

図版８

1. 花形杏葉(上半分) (CT 画像)

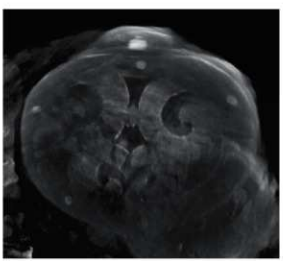


2. 花形杏葉(下半分) (CT 画像)



3. 花形杏葉 (CT 画像)

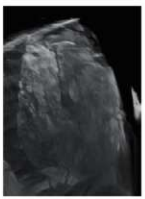
4. 二連三葉文心葉形杏葉 (CT 画像)



5. 唐草文心葉形杏葉 (CT 画像)

6. 心葉形杏葉 (CT 画像)

1. 棘葉形杏葉（CT 画像）



2. 棘葉形杏葉（CT 画像）

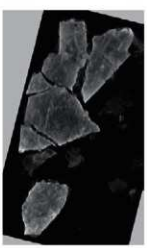
3. 棘葉形杏葉（CT 画像）

4. 棘葉形杏葉（CT 画像）

5. 棘葉形杏葉（CT 画像）

6. 棘葉形杏葉（CT 画像）

7. 棘葉形杏葉（CT 画像）

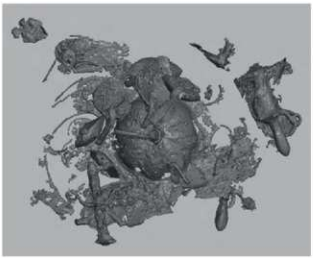


8. 棘葉形杏葉（CT 画像）

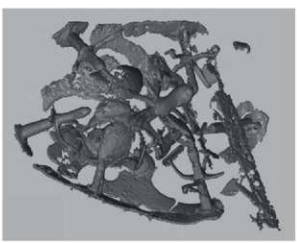
9. 棘葉形杏葉（CT 画像）

10. 棘葉形杏葉（CT 画像）

図版 10



1. 金銅製歩揺付飾金具（雲珠）（STL 画像）



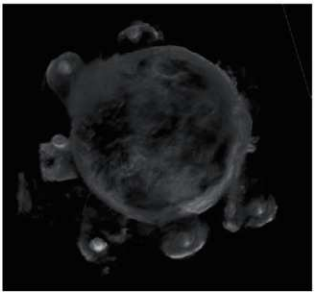
2. 金銅製歩揺付飾金具（雲珠）（STL 画像）

3. 金銅製歩揺付飾金具（雲珠）（CT 画像）

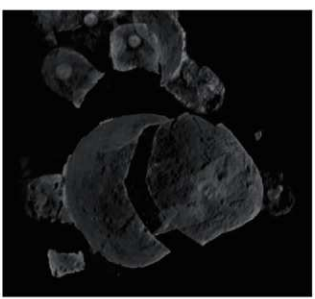
4. 金銅製歩揺付飾金具（雲珠）（CT 画像）

5. ガラス装飾付雲珠（CT 画像）

6. 宝珠付鉢状雲珠（CT 画像）

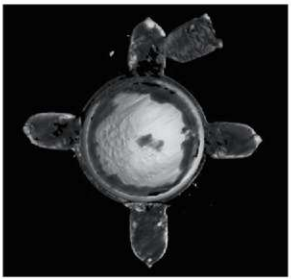


1. 鉢状雲珠Ａ（CT 画像）



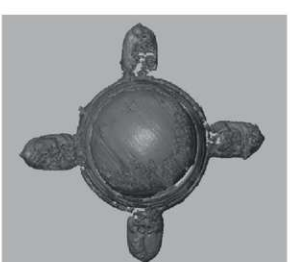
2. 鉢状雲珠Ｂ（CT 画像）

3. ガラス装飾付辻金具（CT 画像）



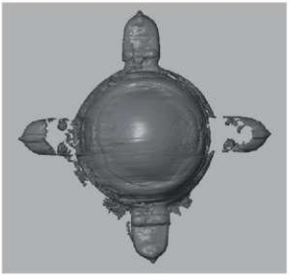
4. ガラス装飾付辻金具（CT 画像）

5. ガラス装飾付辻金具（CT 画像）



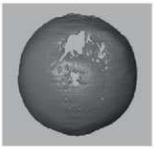
6. ガラス装飾付辻金具（STL 画像）

図版 12



1. ガラス装飾付辻金具（STL 画像）

2. ガラス装飾付辻金具（STL 画像）

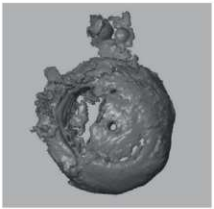


3. ガラス装飾付辻金具（STL 画像）

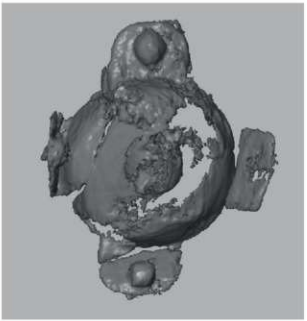
※上のガラス装飾の部分が欠損した個体と同一個体であると推定される.

4. ガラス装飾付辻金具（STL 画像）

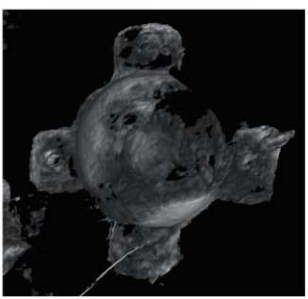
5. ガラス装飾付辻金具（STL 画像）



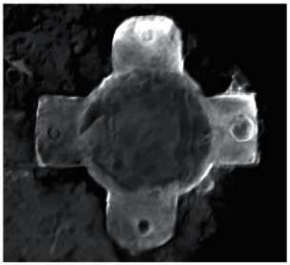
6. ガラス装飾付辻金具（STL 画像）



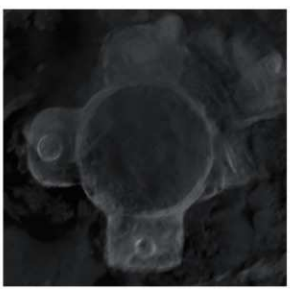
1. 宝珠付鉢状辻金具（STL 画像）



2. 宝珠付鉢状辻金具（CT 画像）



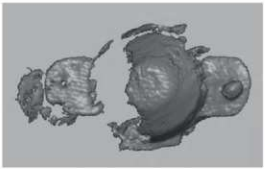
3. 宝珠付鉢状辻金具（CT 画像）



4. 宝珠付鉢状辻金具（CT 画像）

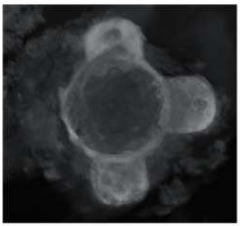
5. 宝珠付鉢状辻金具（CT 画像）

図版 14

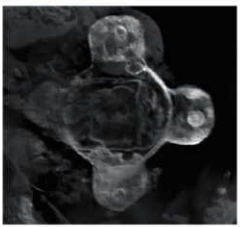


1. 鉢状辻金具（STL 画像）

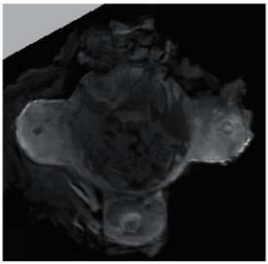
2. 鉢状辻金具（CT 画像）



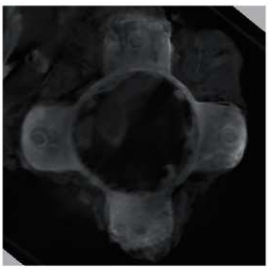
3. 鉢状辻金具（CT 画像）



4. 鉢状辻金具（CT 画像）

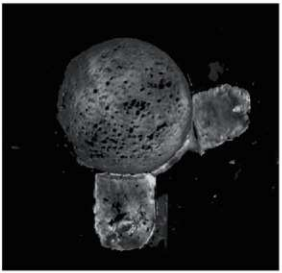


5. 鉢状辻金具（CT 画像）

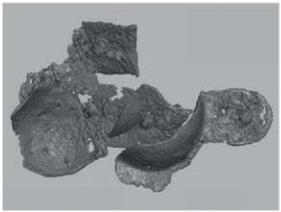


6. 鉢状辻金具（CT 画像）

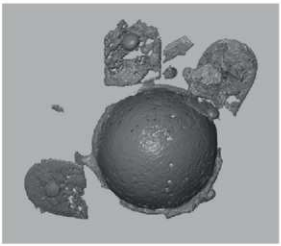
7. 鉢状辻金具（STL 画像）



1. 鉢状辻金具（CT 画像）

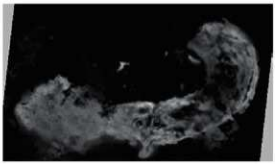


2. 鉢状辻金具（STL 画像）

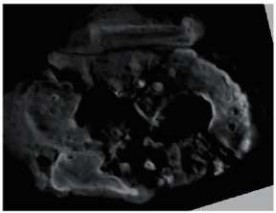


3. 鉢状辻金具（STL 画像）

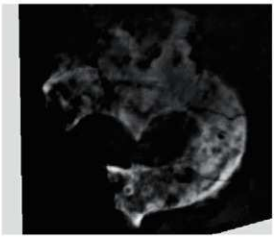
4. 中心部別材辻金具（STL 画像）



5. 障泥吊金具（CT 画像）



6. 障泥吊金具（CT 画像）

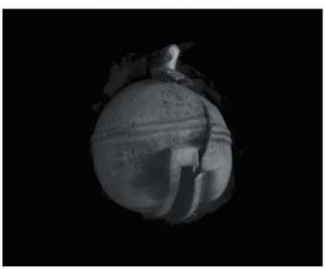


7. 障泥吊金具（CT 画像）

図版 16

1.鈴（大型）（CT 画像）

4.鈴（大型）（CT 画像）

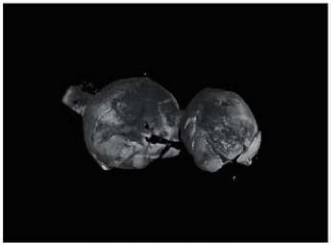


2.鈴（大型）（CT 画像）

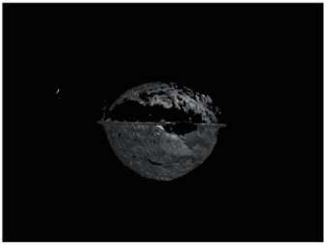
5.鈴（大型）（CT 画像）

3.鈴（大型）（CT 画像）

6.鈴（大型）（CT 画像）



1. 鈴（中型）（CT 画像）



4. 鈴（中型）（CT 画像）

2. 鈴（中型）（CT 画像）

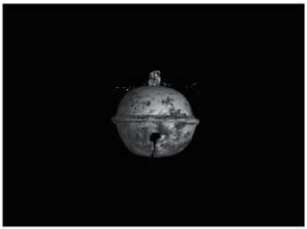
5. 鈴（中型）（CT 画像）

3. 鈴（中型）（CT 画像）

図版 18

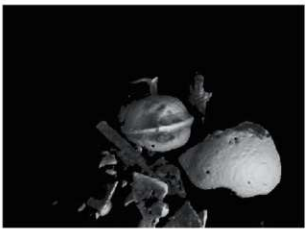
1. 鈴（小型）（CT 画像）

4. 鈴（小型）（CT 画像）



2. 鈴（小型）（CT 画像）

5. 鈴（小型）（CT 画像）



3. 鈴（小型）（CT 画像）

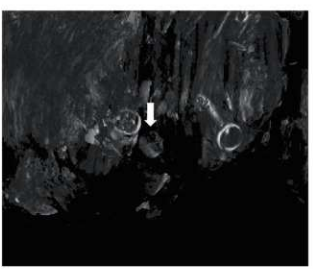
6. 鈴（小型）（CT 画像）

1. 鈴（小型）（CT 画像）

2. 鈴（小型）（CT 画像）

3. 鈴（小型）（CT 画像）

4. 鈴（小型）（CT 画像）



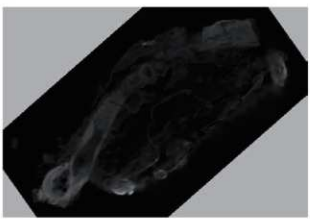
5. 鈴（小型）（CT 画像）

※矢印で示したものが鈴

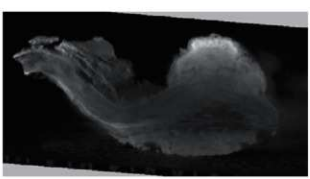
6. 鈴（小型）（CT 画像）

図版 20

1. 蛇行状鉄器（湾曲部 CT 画像）



2. 蛇行状鉄器（湾曲部 CT 画像）

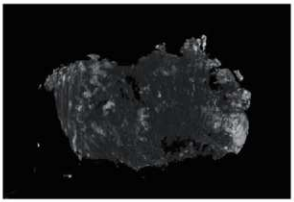


3. 蛇行状鉄器（蛇行部 CT 画像）

4. 蛇行状鉄器（蛇行部 CT 画像）

5. 蛇行状鉄器（袋部 CT 画像）

6. 蛇行状鉄器（袋部 CT 画像）

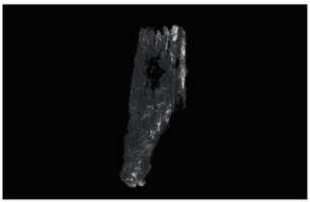


1. 鉄鏃束（CT 画像）

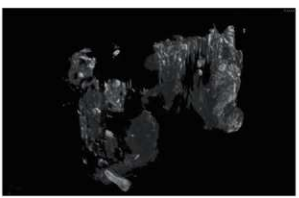
2. 鉄鏃束（CT 画像）

3. 鉄鏃束（CT 画像）

4. 鉄鏃束（CT 画像）



5. 鉄鏃束（CT 画像）



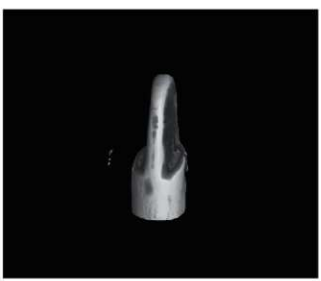
6. 鉄鏃束（CT 画像）

7. 鉄鏃束（CT 画像）

8. 鉄鏃束（CT 画像）

図版 22

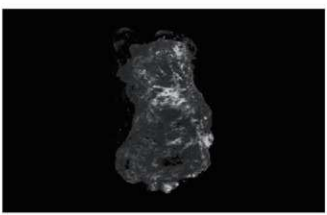
1. 弭（CT 画像）



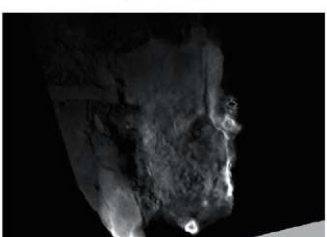
2. 弭（CT 画像）

3. 弭（CT 画像）

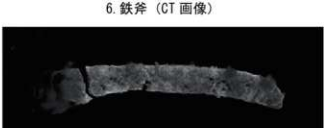
4. U 字形刃先（CT 画像）



5. 鉄斧（CT 画像）



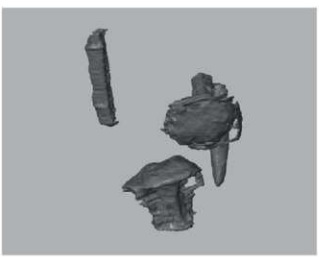
6. 鉄斧（CT 画像）



7. 鉄鎌（CT 画像）

1. 鉄釘（STL 画像）

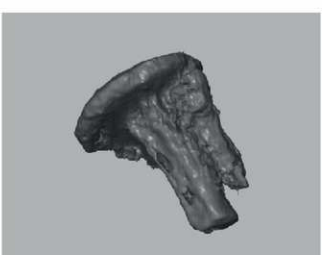
4. 鉄釘（STL 画像）



2. 鉄釘（STL 画像）

5. 鉄釘（STL 画像）

3. 鉄釘（STL 画像）



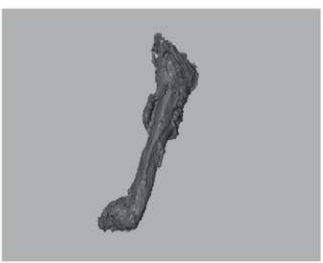
6. 鉄釘（STL 画像

図版 24

1. 鉄釘（STL 画像）

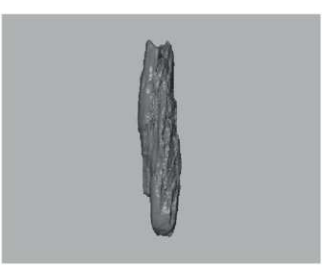
4. 鉄釘（STL 画像）

2. 鉄釘（STL 画像）

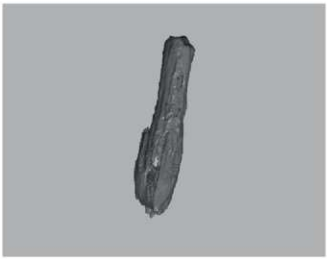


5. 鉄釘（STL 画像）

3. 鉄釘（STL 画像）

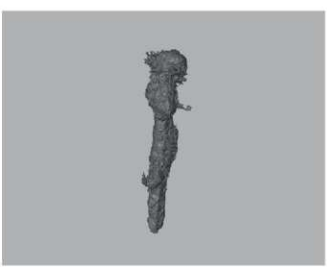


6. 鉄釘（STL 画像）

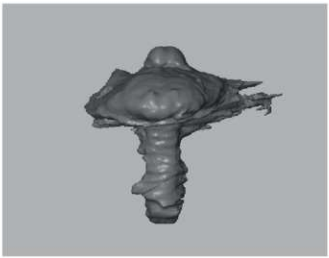


1. 鉄釘（STL 画像）

2. 鉄釘（STL 画像）

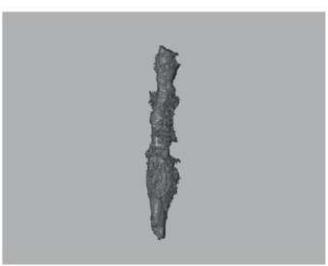


3. 鉄釘（STL 画像）



4. 鉄釘（STL 画像）

5. 鉄釘（STL 画像）



6. 鉄釘（STL 画像）

図版 26

1. 鉄釘（STL 画像）

2. 鉄釘（STL 画像）

3. 鉄釘（STL 画像）

1. 小札②下-9

2. 小札②下-20-3

3. 小札②下-15②-26

4. 小札②下-22

5. 小札⑨下 1-1

6. 小札⑧上 3-5

図版 28

1. 小札⑥上-1

4. 小札⑦下-6

5. 小札⑧下-6-3

2. 小札⑥上-7

6. 小札⑧上-2-2

3. 小札⑥下-2-2-5

7. 小札⑨下-5-2

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふなばるこふん
書名	船原古墳Ⅱ
副書名	1号土坑出土遺物概要報告編
巻次	
シリーズ名	古賀市文化財調査報告書
シリーズ番号	第73集
編著者名	古賀市教育委員会
編集機関	古賀市教育委員会
所在地	〒811-3192　福岡県古賀市駅東1丁目1番1号
発行年月日	西暦　2019年　3月　31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
船原古墳群	福岡県古賀市谷山字柳原1166-1、小山田字舟原506-4　他	40347		33 42 51	130 30 09	平成25年4月1日 ～ 平成31年3月31日	4,400	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船原古墳	古墳	古墳	古墳2基 土坑	金銅装鞍、金銅製辻金具、金銅装鏡板付轡、歩揺付飾金具、銅鈴、金銅装杏葉、小札甲、馬冑、鉄鏃他	

※ 緯度、経度は世界測地系による。

船 原 古 墳 Ⅱ

— 1号土坑出土遺物概要報告編 —

福岡県古賀市文化財調査報告書　第73集

2019（平成31）年3月31日

発行　福岡県古賀市教育委員会
　　福岡県古賀市駅東1丁目1番1号

印刷　有限会社　システム・レコ
　　福岡市東区多の津1丁目14番1号